茨城地酒 に・ほ・ん・も・の

人と酒と町を結ぶ嫁杜氏

結城酒造（結城市）

中田英寿氏の旅、二箇所目の蔵は、結城市にある結城酒造。かつて城下町として栄えたこの町には数々の歴史的文化遺産が残り、結城酒造もそのひとつ。国登録有形文化財にその名を記す古い蔵で、今なお酒を造っている。
現在、結城酒造の杜氏を務めるのは浦里美智子氏。女性で、しかも「嫁」が杜氏になるのは珍しいこと。嫁入りするまで酒造りのイロハも知らなかった美智子氏は、今や茨城を代表する杜氏として活躍している。急成長を遂げた注目の蔵で、話を聞いた。

国内向け市場において一躍脚光を浴びた結城酒造。中田氏も舌を巻く酒造りのセンスを有する浦里美智子氏は「常陸杜氏」にも認定。今後、茨城の酒造りをリードするだろう。

創業安政年間、歴史ある蔵元の嫁

「美智子さんのことは長く知っていたけれど、蔵には初めて来ました。ずっと来たかったんです」という中田氏。蔵の前に立ち、その趣に驚いた。裏手にある煉瓦煙突とともに国の登録文化財に指定されている蔵は安政蔵と呼ばれ、江戸時代の安政年間に建てられたもの。くぐり戸がついた跳ね上げ式の大きな木戸から入り、ひんやりとした土間へ踏み入った中田氏。説明を受け「登録文化財！造るのにも住むのにも大変そうですね。登録を受けると（改修なども自由に出来ず）中々大変ですから」と、蔵の歴史に感服すると同時にその住空間の難しさを想像したようだ。

当代社長の妻・美智子氏はまだまだ珍しい女性杜氏ながら、彼女の醸す酒は中田氏が実行委員を務めるSAKE COMPETITIONで二〇一六年純米酒部門、二〇一八年純米大吟醸部門でGOLDをそれぞれ受賞。近年急成長を遂げている。特に「雄町」という酒造好適米を使った酒に定評があり、同じ女性からの人気も高い。

そんな彼女は結城市の隣、筑西市の出身で実家は専業農家。酒造りのことなど何一つ知らず楽観視して結城酒蔵へ嫁いできたが、その環境を目にして愕然としたという。門外漢の嫁が、なぜ酒造りの道に入ったのか。彼女の話に興味深く耳を傾けていた中田氏は、そのプロセスについて問いかけた。

逆境を好機に変える美智子の酒

元々、酒は好きだが日本酒はあまり飲まなかったという美智子氏。ある日、たまたま仕込み酒のしぼりたてを試飲し「ピチピチしてすごく美味しい！」と感動を覚えたのをきっかけに、日本酒を嗜むように。ところが、蔵にある瓶詰酒を飲んでも美味しくない。その違いに興味を持ち、専門店で他の蔵の酒を買ってみれば今度は美味しい。何故、という問いかけが酒造りの原点だと彼女は話す。

当時の結城酒造は葬儀用などの普通酒が主力で、市内での消費がほとんど。しかし業界の潮流は特定名称酒で、売り上げは落ち込むばかり。このままでいいのか、悶々とする中で、茨城県産業技術イノベーションセンターの酒造研修が開催されることになった。二〇一二年のことだ。

ちょうど子育てがひと段落したタイミングで研修に立候補した美智子氏は、本格的で細やかな酒造りを学び、醸す大変さと共にやりがいを知る。「そこで勉強したことを活かしながら、徐々に徐々に少しずつ仕事を任せてもらうようになったわけですか？」（中田氏）と思いきや――俄然やる気に火が点いた彼女は、その年のうちにタンク一本の仕込みに挑戦したというから驚きだ。

「その年に？へえ。造った最初の一本は、どんなお酒だったんですか？」（中田氏）

「雄町の（精米歩合）五十％です。